

陸諸道大水幕府赤坂門下成河、本所深川傍村及市舎漂壊、民多溺死、信濃善光寺前水深二丈餘、上野下野武藏常陸損稼禾八十萬斛、北陸等亦多損毛云。

〔武江年表〕寶曆七年四月より五月迄霖雨、關東洪水、奥州飢饉にて、江戸の米價も次第に登揚せり、

〔翁草百五〕丙午之凶歲、往事渺茫たる折から、ひとりの友我○其鷗澤、九邊に遊びて、問て曰、舊年の丙午〇天明元日のエトも丙午にして、而も日蝕皆既なり、仍て火を慎しむべき年なりとて、公武に於て御祈など有し、驗にや、火一變して水となり、春の内より雨降續き、九夏三伏に暑を不知、何國にも火災の沙汰なく、諸人安堵の思をなす處に、炎熱なき故にや、海内一圓に穀不實、水論は勿論、左無き所も水溢れ、殊に東國は洪水にて、江都は神君家康御開國以來、未曾有の水難、其上、上に御大變有之、寵臣御勘氣を得られ、杯天變、地怪、人事迄、悉く大凶故、米價素より諸物の價古今希有に貴く成て、國々の飢饉云はん方なし、係る凶年百年來に有じにや、以前の丙午は奈何、余答て曰、以前の丙午は享保十一年なり、余は十七歳なれば、凡の事は覚え侍りぬ、今の間に仍て、尙考ふるに、其年は豊凶の沙汰もなく、只の年なりき、其ころ老たる人の咄しに、寛文六の丙午は凶年なりしが、今年は無事にて宜敷と云へるを思ひ出せし許なり、去れば翁が物を覚えて後、舊年程の凶年はなし、七十年來或は西國又は畿内、東北國の變事は折々聞きぬれども、四隅の國々一圓に凶たるを不聞、享保六七年、國々洪水、同十八年、西國の虫入も、米價は凡そ舊年に等しく貴かりしが、餘國には格別の變事なかりき、又元文の頃、雨ふり續き、暑無き年一年有し、其頃戲に春、梅雨、秋、冬と云しなり、其時分は連年畿内洪水して、木津邊、淀八幡の水難云ばん方なし、山々崩潰へて、諸木折れ倒れ、適々殘る喬木も、梢僅に顯れ、半は過るまで、土砂に埋れて小樹の如し、山には青兀の色なく、唯盛砂の崩れ掛けたるに似たり、田地は悉く河原と成川床は地形よりも高く埋り、民村